

# 朝鮮と日本の自他認識

— 13～14 世紀の「蒙古」観と自己認識の変容 —

井 上 厚 史

1. はじめに
2. 朝鮮の自他認識
3. 日本の自他認識
4. 結語

## 1 はじめに

極東に位置する朝鮮と日本が「北東アジア」を意識し始めるのはいつ頃だろうか。

まず、韓国について考えてみると、古朝鮮の時代から高句麗・新羅・百済の三国時代に及ぶまで朝鮮は中国の圧倒的な文化的影響下にあり、中国以西の地域を意識することは稀であった。その状況が一変するのは、モンゴル人による征服王朝である元朝が高麗王朝を征服＝支配することによって、朝鮮にモンゴルの政治・文化が大量に流入することになった時である。

一方、日本について考えてみると、モンゴル襲来以前に仏教の受容をめぐるインド(天竺)や中国(震旦)が意識されたことはあったが<sup>1</sup>、「北東アジア」との本格的な出会いは、やはり何と言っても「元寇」(文永・弘安の役：一二七四、一二八一)であった。日本人にとって元寇は歴史上の一大事件であり、それ以後多くの伝承や物語が生み出された。

以上の見通しのもとに、本稿では、朝鮮と日本が「北東アジア」との本格的出会い＝衝突であるモンゴル(蒙古)をどのような他者として認識していたのか、そしてそれともななって自己認識はどのように変化したのかの解明を試みることにする。分析にあたっては、朝鮮については『高麗史』『朝鮮王朝実録』をテキストとし、日本については『八幡愚童訓』<sup>2</sup>『太平記』『神皇正統記』等をテキストとして、両国の自他認識のパターンの異

---

1 市川浩史によれば、元寇以前に日本人が保有していた世界観は、仏教的世界観としての天竺(インド)・震旦(中国)・本朝(日本)という「三国世界」観、およびそれ以外の地域を意味する「異界(朝鮮等)」観という二つの要素から構成された単純なものであったという。市川浩史『日本中世の光と影』ベリかん社、一九九九、九二～九八頁。

2 近年蒙古襲来に関する研究が進み、元寇の真の姿(すなわち史実としての元寇)が明らかに

同の抽出を試みる。

## 2 朝鮮の自他認識

朝鮮がどのようにモンゴル（蒙古）を認識したのかについて、時代を高麗王朝時代（九一八―一三九二）と朝鮮王朝建国時代（一三九二～）とに区切り、まず高麗時代の認識から検討することにする。

周知のように、高麗王朝は一三世紀にモンゴル人が中国に設立した元朝の直接的支配下に置かれることになった。一二二五年、モンゴルの使者が高麗から貢物を受け取って帰国する際に殺害されるという事件が起こり、それ以来六度にわたる侵攻を受け、高麗全土がモンゴル軍に蹂躪された。一二五四年の第五次侵攻では、捕虜となった者が二十万六千八百余人、死者は「骸骨野を蔽う」ほどであったという<sup>3</sup>。

高麗とモンゴルの出会いを、『高麗史』（孫暁主編『標點校勘本 高麗史』一～十、西南師範大学出版社・人文出版社、二〇一三）をテキストとして、直接の出会いと支配・被支配がどのように記述されているかを概観してみよう。

### （1）高麗時代のモンゴルとの出会い

『高麗史』に残されているモンゴル関係の記述を整理すると、以下のようになる<sup>4</sup>。

西暦	国王	できごと
1219	高宗	契丹族の侵入をモンゴル軍と協力して江東城で殲滅し、モンゴルと朝鮮間に和議が成立
1225	高宗	モンゴルが高麗に貢納を要求するが、モンゴル使者の不慮の死を口実に国交を断絶
1231	高宗	モンゴル軍が大軍を率いて高麗に侵入（第一次高麗侵入）し、この後も断続的な侵入が続く
1254	高宗	モンゴル軍が慶尚道まで南下。「是歳、蒙兵所虜男女、無慮二十萬六千八百餘人、殺戮者不可勝計、所經州郡皆爲燼。自有蒙兵之亂、未有甚於此時也。」 <sup>5</sup>

されつつある。たとえば、服部英雄は『〔八幡〕愚童訓』を排除し、『勘仲記』のような一次資料に語らせる。そこにはじめて真実の歴史がみえてくる」（服部英雄『蒙古襲来』山川出版社、二〇一四、一七〇頁）と主張しているが、本稿で扱うのは、史実としての元寇よりも、当時の日本人が元寇をどう捉えていたか、あるいはどう捉えようとしていたかであり、当時の心性を理解する上で『八幡愚童訓』は重要な資料であると考えられる。

3 関周一編『日朝関係史』吉川弘文館、二〇一七、一〇三―一〇四頁。

4 武田幸男編『朝鮮史』山川出版社、二〇〇〇、第三章「高麗王朝の滅亡と国際情勢」より作成。

5 孫暁主編『標點校勘本 高麗史』卷二十四〔高宗三（一二五四）年冬十一月―二月〕、七五七―七五八頁。

1258	高宗	朝鮮東北部の趙暉らが反乱を起こしてモンゴル軍に投降し、「雙城総管府」が設置される
1259	英宗	高麗がモンゴルに服属
1260	元宗	モンゴルで世祖フビライが即位するのに合わせて、高麗で元宗が即位し、両国の新たな関係づくりが始まる
1269	元宗	朝鮮西北部の崔坦らがモンゴルに帰順し、「東寧府」が設置される
1273	元宗	三別抄の反乱を耽羅（済州島）で鎮圧し、「耽羅総管府」が設置される <sup>6</sup>
1274	忠烈王	高麗の世子がフビライ帝の駙馬（娘婿）となった後に即位して忠烈王となり、高麗の元（モンゴルは1271年に国号を大元に改変）への服属が始まる
—	忠烈王	同年10月に、高麗はフビライ主導のもとで日本に侵寇（文永の役）
1279	忠烈王	忠烈王からの日本再征提案を受けて、開京に「征東行省」が設置され、第二次征伐を実行（弘安の役）
1356	恭愍王	恭愍王、中国における元から明への交替に先んじて、元に対する服属関係の解消を表明
1368	恭愍王	朱元璋、明の樹立を宣言
1369	恭愍王	明の洪武帝（朱元璋）が高麗に対し、正式に国号「大明」と年号「洪武」を通告したことを受けて、元との国交を断絶
1392	恭讓王	李成桂が恭讓王を廃して王位に就き、朝鮮王朝の太祖となる

一二二五年の第一次侵攻から一二五八年のモンゴル軍への投降まで六度の侵攻を経験した高麗は、一二七三年に済州島（耽羅）に逃れて抵抗していた三別抄の軍も鎮圧されるにいたると（三別抄の乱）、忠烈王は元朝への服属を決定する。その五〇年ほどの間に、高麗はモンゴル軍との直接的交戦＝衝突を経験し続けたことになり、それに関する記述も生々しいものが多い。

まず、『高麗史』に記述された他者（すなわち「蒙古」）認識が表出された代表的言説は以下のとおりである。

- ①「君是天也，父母也，方殷憂大戚如此，而不於天與父母，而又於何處訴之耶？伏望皇帝陛下，推天地父母之慈，諒小邦靡他之意，敕令大軍，回轅返旆，永護小國，則臣更努力竭誠，歲輸土物，用表丹悃，益祝皇帝千萬歲壽，是臣之志也。伏惟陛下，小加憐焉。」<sup>7</sup>

6 金日宇／文素然著（井上治監訳 石田徹／木下順子翻訳）『韓国・済州島と遊牧騎馬文化』明石書店、二〇一五を参照。

7 前掲『高麗史』巻第二十三〔高宗十九（一二三一）年冬十一月〕、七二二頁。

- ②「夫所謂蒙古者，猜忍莫甚，雖和之，不足以信之，則我朝之與好，非必出於本意。然如前書所通，越己卯歲，於江東城，勢有不得已，因有和好之約，是以年前其軍馬之來也，彼雖背盟棄信，肆虐如此，我朝以謂寧使曲在彼耳。」<sup>8</sup>
- ③「國書曰：『我國臣事蒙古大國，稟正朔有年矣，皇帝仁明，以天下爲一家，視遠如邇，日月所照，咸仰其德。今欲通好於貴國〔日本のこと一筆者注〕而詔寡人云：『日本與高麗爲隣，典章政治有足嘉者，漢唐而下屢通中國，故特遣書以往，勿以風濤阻險爲辭。』其旨嚴切，茲不獲已，遣某官某奉皇帝書前去。貴國之通好中國，無代無之。況今皇帝之欲通好貴國者，非利其貢獻，蓋欲以無外之名高於天下耳，若得貴國之通好，必厚待之。其遣一介之士以往觀之，何如也，貴國商酌焉。』」<sup>9</sup>
- ④「陞〔陞〕下降以公主〔天子の娘一筆者注〕，撫以聖恩，小邦之民，方有聊生之望，然茶丘（洪茶丘：高麗時代の文臣一筆者注）在焉，臣之爲國，不亦難哉。如茶丘者，只宜理會軍事，至於國家之事，皆欲擅斷，其置達魯花赤於南方，亦非臣所知也。上國必欲置軍於小邦，寧以韃靼漢兒軍，無論多小〔少〕而遣之，如茶丘之軍，惟望召還。」<sup>10</sup>

次に、高麗の自己認識が表出された代表的言説は以下のとおりである。

- ⑤「弊邑本海外之小邦也，自歷世以來，必行事大之禮，然後能保有其國家，故頃嘗臣事于大金。及金國鼎逸，然後朝貢之禮始廢矣。越丙子歲，契丹大舉兵，闖入我境，橫行肆暴。至己卯，我大國遣帥河稱，扎臘領兵來救，一掃其類。小國以蒙賜不貲，講投拜之禮，遂向天盟告，以萬世和好爲約，因請歲進貢賦所便。」<sup>11</sup>
- ⑥「夫主國山川，依人而行者，神之道也，則所寓之國，所依之人，能不哀矜而終始保護耶？本朝自昔三韓，鼎峙爭疆，萬姓塗炭，我龍祖應期而作，俯循人望，舉義一唱，四方響臻，自然歸順。然當草昧間，或有不軌之徒，嘯聚蜂起，而以尺劍，掃清三土，合爲一家。然後，聖聖相繼，代代相承，以至於今日矣。三百餘載之間，時數使然，災變屢興，卽能戡定者，全是我諸神僉力潛扶，保安社稷之所致也。越辛卯歲以來，不幸爲蒙人所寇，國家禍亂，不可殫言。嗟呼！」<sup>12</sup>

これら①～⑥の史料から、以下の五点を確認することができる。

- (a) 「啓」などのモンゴル皇帝に差し出す公式文書では、「君主は天であり、父母でありま

8 同、〔同年十二月〕、七二四頁。

9 同、世家第二十六〔元宗八（一二六六）年八月〕、八一五～八一六頁。

10 同、世家第二十八〔忠烈王（一二七七）四年六月〕、九〇〇頁。

11 同、世家第二十三〔高宗十九（一二三一）年冬十一月〕、七二〇頁。

12 同、世家第二十四〔高宗四十一（一二五三）年冬十月〕、七五六～七五七頁。

す。……伏して皇帝陛下にお願い申し上げたいのは、天地父母の慈しみをもって小邦に二心がないことをご理解くださり、軍隊を引き返して末永く小国を保護してくださいますならば、私どもはさらに努力して誠を尽くし、毎年土産物をお送りして赤誠の心をあらわし、ますます皇帝のお命が永遠に続くことを祝します、これが私どもの志でございます」(史料①下線部)と、モンゴル皇帝に対して「天」や「父母」と同様の絶対的服従を表明する一方で、本音の部分では「いわゆる蒙古とは、猜忍なること甚だしく、それと講和を結んでも信用するには足らず、わが朝が仲良くしているのは、必ずしも本意から出たものではありません」(史料②下線部)のように、モンゴル人を妬み深くて無慈悲で信用できない民族と表現しており、両義的なものとして認識されていた。

- (b) 朝鮮から日本への国書には「わが国は蒙古大国に臣事することがもう何年にもわたっています。皇帝の仁徳は明らかであり、天下を一家とみなして遠近の差をつけることもなく、日月が照らす所はみんなその徳を仰いでいます」(史料③下線部)と記されており、また忠烈王のモンゴル皇帝への奏上文には「陛下が皇女を降され、聖恩によって撫育して下さることによって、(わたしども)小邦の民はまさに安心して生きる望みがあります。……上国がどうしても軍隊を小邦に設置したいとお望みならば、むしろ韃靼か漢人の若者の軍隊を多少を問わず派遣されて」(史料④下線部)と記されている。このことから、モンゴルを「大国」「上国」、それに対して自国を「小邦」と表現し、自他認識は大小あるいは上下の範疇によって認識されていた。
- (c) モンゴル皇帝に陳情した書面では、「弊邑はもともと海外の小邦であります。歴史が始まって以来、必ず事大の礼を行い、そうして国家を保ってきました。それゆえ、近頃かつて大金に臣事していましたが、金国が敗亡するに及んで初めて朝貢の礼を取りやめました。(しかし)丙子の年(一二一六)を過ぎると、契丹が大挙派兵してわが境域内に乱入して好き勝手暴行しました。己卯(一二一九)になると、わが大国(元)が軍帥の河稱と扎臘を派遣して領兵が助けに来てくださり、奴らを一掃していただきました。小国にとってその大恩はつぐなえないほどであります」(史料④下線部)と言っているように、高麗は「海外の小邦」であり、大国に対して常に「事大の礼」を行って臣事し、「朝貢の礼」を行ってきたことを認める一方、宗廟への祈告文では、「本朝は三韓の昔から、三方に向かって境界を争い、あらゆる一族が塗炭の苦しみを味わい、わが王でさえも時には味わい、伏して人民の望みにしたがって義兵を起こそうと唱え、四方が声に応じて集まり、自然に帰順しました。しかし、混乱した時にもし謀反の徒がいれば、号令によって人を集めて蜂起し、剣によって三土を掃討し、合わせて一家にできました」(史料⑤下線部)というように、塗炭の苦しみを味わうような侵略に対してはその都度「義兵」を起こして抵抗し、また国内の謀反勢力を掃討しながら統一を保ってきたことが力説されている。
- (d) 蒙古(モンゴル)を「天」「父母」「大国」「上国」と表現しているのは、高麗のそれ

までの対中国認識をそのままモンゴルに当てはめたものである<sup>13</sup>。これは、朝鮮人（高麗）はモンゴルを中国皇帝＝「天」に代置するものとして認識していたことを示すものであり、朝鮮人（高麗）の世界観において「北東アジア地域」が特に意識されていたとは考えられない。

- (e) 自国（高麗）を「弊邑」「小邦」と表現しながらも、侵略に対しては「義兵」によって防御し、謀反の徒に対しては「尺剣」によって掃討して統一を保ってきたことが強調されているのは、三国を統一したこと（合為一家）が高麗のナショナル・アイデンティティとなっていたことをうかがわせるものである。

## (2) 朝鮮王朝建国時代の「蒙古」観と自己認識

では、朝鮮王朝建国時代のモンゴル（蒙古）認識はどのようなものだったのだろうか。ここでは、『朝鮮王朝実録』（国史編纂委員会『朝鮮王朝実録』web版 <http://sillok.history.go.kr/main/main.do>）をテキストとして、朝鮮王朝時代の蒙古に対する自他認識を確認してみたい。

まず、他者（すなわち「蒙古」）認識が表出された代表的言説は次のとおりである。

⑦「司譯院提調僕長壽等上書言：臣等竊聞，治國以人才爲本，而人才以教養爲先，故學校之設，乃爲政之要也。我國家世事中國，言語文字，不可不習。是以殿下（朝鮮の国王一筆者注）肇國之初，特設本院，置祿官及教官，教授生徒，俾習中國言語，音訓，文字，體式，上以盡事大之誠，下以期易俗〔悪い風俗を改めること一筆者注〕之効。臣等今將擬議到習業，考試等項合行事務，開寫于後。

一、額設教授三員内，漢文二員，蒙古一員，優給祿俸。生徒額數，分肄習業，考其勤慢，以憑賞罰，并及教授之官。

一、習業生徒，鮮有自願來者。令在京五部及各道界首府州，擇良家子弟十五歳以下天資明敏者，歳貢一人。

一、每三年一次考試，勿論是（無）〔否〕本院生徒，七品以下人，但能通曉四書，《小學》，吏文，漢・蒙語者，俱得赴試。習漢語者，以四書，《小學》，吏文，漢語皆通者，爲第一科，與正七品出身；通四書之半及《小學》，漢語者爲第二科，與正八品出身。止通《小學》漢語者爲第三科，與正九品出身。習蒙語者，能譯文字，能寫字樣，兼寫偉兀（ウイグル）字者爲第一科；只能書寫偉兀文字，并通蒙語者爲第二科，出身

---

13 森平雅彦によれば、「高麗がモンゴルに送った啓では、モンゴル官人に対して尊官・貴人に対する尊敬である「閣下」を用い、モンゴル官人側の指示・命令についても尊官・貴人のおおせを意味する「鈞旨」を用いる一方、自国のことは「小国」・「小邦」・「弊邑」と卑称している。したがって、基本的には相手を上にたてた形式で書かれたものとみて大過なからう」と説明している。森平雅彦『モンゴル覇権下の高麗』名古屋大学出版会、二〇一三、二一三頁。

品級同前。其原有官品者，第一科升二等，第二科三科各升一等。漢語第一科一人，第二科三人，第三科八人；蒙語第一科一人，第二科二人，通取一十五人，以為定額。若無堪中第一科者，只取第二科三科，又無堪中第二科者，只取第三科，不拘定數。一，每年都目各望，并錄三人，以漢語精通者為頭。雖差年，到數多餘，亦不許錄於語音精通人員之上，若三人俱通者，聽以差年，到數為頭。

一，（隸）〔肄〕業三年，不能通曉漢，蒙語者，斥遣充軍。

一，考試中選者，人給紅牌。

一，通上寫“司譯院敬奉王旨，某人可賜通事第幾科幾人出身者。”年月上，行使本院印信，提調以下具銜署名。

下都評議使司，擬議施行。』<sup>14</sup>

⑧「遣計稟使藝文館提學金瞻如京師。瞻與可仁偕行。奏本云：照得，本國東北地方，自公嶮鎮歷孔州，吉州，端州，英州，雄州，咸州等州，俱係本國之地。至遼 乾統七（一一〇七）年，東女真作亂，奪據咸州迤北之地。高麗 睿王 王侯告遼請討，遣兵克復。及至元初戊午（一三一八）年間，蒙古 散吉普只等官，收付女真之時，本國叛民趙暉，卓青等，以其地迎降，以趙暉為總管，卓青為千戶，管轄軍民。由是女真人民，雜處其間，各以方言，名其所居，吉州稱海陽，端州稱秃魯兀，英州稱三散，雄州稱洪肯，咸州稱哈蘭。至至正十六（一三五六）年間，恭愍王 王顥，申達元朝，竝行革罷，仍以公嶮鎮迤南，還屬本國，委定官吏管治。聖朝（明朝一筆者注）洪武二十一（一三八八）年二月，承準戶部咨，該侍郎楊靖等官，欽奉太祖高皇帝（朱元璋一筆者注）聖旨節該：“鐵嶺迤北迤東迤西，原屬開原，所管軍民，仍屬遼東所管。”欽此，本國即將上項事，因差陪臣密直提學朴宜中，齎擎表文，前赴朝廷控訴，乞將公嶮鎮迤北，還屬遼東；公嶮鎮迤南至鐵嶺，還屬本國。至當年六月十二日，朴宜中回自京師，承準禮部咨，該本部尙書李原明等官，於當年四月十八日，欽奉聖旨節該：“鐵嶺之故，王國有辭。”欽此，仍舊委定官吏管治。…（中略）…竊念小邦遭遇聖朝以來，累蒙高皇帝詔旨，不分化外（中國文化圈の外一筆者注），一視同仁。又欽準聖朝戶律內一款：“其在洪武七年十月以前，流移他郡，曾經附籍當差者勿論。”欽此，小邦既在同仁之內，公嶮鎮迤南，又蒙高皇帝王國有辭之旨，所據女真遺種人民，乞令本國管轄如舊，一國幸甚。為此，今差陪臣藝文館提學金瞻，齎擎奏本及地形圖本，赴京奏達。』<sup>15</sup>

次に、朝鮮の自己認識が表出された代表的言説は次のとおりである。

⑨「十二月，太祖以親兵一千六百人至義州，……又勝金，復州等處曰：本國與堯竝立，

14 『太祖実録』太祖三（一三九四）年十一月一九日条。

15 『太宗実録』太宗四（一四〇四）年五月一九日条、同前。

周武王封箕子于朝鮮，而賜之履西至于遼河，世守疆域。元朝一統，<sup>りこう</sup> 釐降（天子が娘を臣下の嫁にやること一筆者注）公主，遼瀋地面，以爲湯邑（王から与えられた土地一筆者注），因置分省。叔季失德，天子蒙塵于外，遼瀋頭目官等，罔聞不赴，又不修禮於本國，即與本國罪人奇賽因帖木兒，結爲腹心，嘯聚虐民，不忠之罪，不可逭也。』<sup>16</sup>

これら⑦～⑨の史料から、以下の二点を確認することができる。

- (f) 朝鮮王朝建国時代になると、太祖李成桂はただちに「わが国は代々中国に臣事し、言語や文字は中国語を習得しなければならなかった。そこで、王は建国の初めに司訳院を特設して、……中国語の音訓や文字、体式を学習させて、上は事大の誠を尽くし、下は易俗の効を期した」（史料⑦下線部）と宣言して中国語学習を本格化させ、モンゴル語ができる官僚よりも中国語ができる官吏を優遇し始めた。さらに太宗の時代になると、「聖朝洪武二十一（一三八八）年二月には、……太祖高皇帝の『鐵嶺より北や東や西はもともと開原に属していたのであり』という聖旨を欽奉して行き渡らせた」（史料⑧下線部）や、「ひそかに思うに、小邦が聖朝に遭遇して以来、何度も高皇帝の詔旨をうけたまわり、中国文化の外にあるものを分け隔てせず、一視同仁である」（同）と述べているように、急速にモンゴルとの関係を清算し、中国との一体化を強調し始めている。
- (g) 自己認識においても、「本国は堯と並び立ち、周の武王が箕子を朝鮮に封じると、それを賜って西の遼河を治め、代々疆域を守ってきた」（史料⑨下線部）というように、朝鮮の建国は堯と同時代であり、周の武王が箕子を朝鮮の領主として派遣されたことに始まると述べ、やはり中国と同源であることが強調されている。

### (3) まとめ：一三・一四世紀における朝鮮人の蒙古観と自己認識の変容

以上(a)～(g)までを総括してみると、モンゴルが高麗に影響を及ぼし始めた一三世紀初頭から一四世紀末における朝鮮人のモンゴル認識は、「啓」などの公式文書においては「天」「父母」「大国」「上国」などの用語が使われているものの、それは従来中国への臣従の形式を踏襲するものであり、朝鮮王朝に見られるような「聖朝」という言葉が使われることはなかった。そして朝鮮王朝では急いで中国との一体化（一視同仁）が強調されていることを考えてみても、朝鮮人のモンゴル認識は、結局中国認識の枠を超え出るものではなかったと言えよう。

さらに、中国との一体化の強調は、朝鮮自身を中国出自の民族である〈箕子〉という伝統の創造にまで至っており、朝鮮にとって建国当初より〈中国と一体化する〉ことがナショナル・アイデンティティに関する最重要課題であったと考えられる。

---

16 『太祖実録』総序（一三九二）年、同前。



### 3 日本の自他認識

では、日本社会は元寇をどのように受け止め、どのような反応を示したのだろうか。

二度にわたる蒙古襲来（元寇）は、当時の日本社会一般の国家観念や国家意識などの観念的レベルで大きな変動をもたらした。異国の日本列島襲来という未曾有の事件に対して、朝廷や幕府は各地の寺社に対して「異国降伏」の祈祷を要請したと言われている<sup>17</sup>。

そうした動きの中でとりわけ注目されたのが、八幡神であった。八幡神は大分県宇佐市にある宇佐神宮（八幡宮）を起源とし、その後九世紀に京都府八幡市にも石清水八幡宮が建立され、神功皇后や王城鎮護の神として崇められるようになっていた。蒙古襲来を期に、八幡宮の祀官たちは元寇と八幡神を結びつけたストーリー、すなわち八幡神に関する「縁起」を続々に制作し、朝廷や幕府だけでなく一般の人々にも八幡神信仰が広まっていった<sup>18</sup>。

鎌倉（一一八三―一三三三）・室町時代（一三九二―一四九三）の「蒙古」観と自己認識の変容を示す代表的テキストとして、まず初めに『八幡愚童訓』（一三一八）を取り上げることにする<sup>19</sup>。

#### （1）元寇を記録した『八幡愚童訓』

『八幡愚童訓』は、蒙古襲来をきっかけとして編成されたテキストであるにもかかわらず、冒頭に朝鮮に対する警戒と敵愾心を象徴するストーリー、すなわち「神功皇后三韓征伐譚」が長々と掲載されている<sup>20</sup>。そこでは神功皇后に対して、「今ノ皇后ハ、弓箭ヲ執

17 前掲『日本中世の光と影』、一二二頁。なお、中国宝慶二年（一二二六）に編纂が開始され紹定元年（一二二八）年に完成した南宋地方志である『宝慶四明志』（全二十一巻、羅潛等撰、四明とは当時の慶元府のこと）に、「倭人冒鯨波之險、舳艫相衝、以其物來售、市舶務実司之。然藉抽博〔抽解と博売〕之入、以裨国計硫黄板木而已、金非所利也」（『宝慶四明志』続志卷八「蠲免抽博倭金』という記述があることに注目し、当時日本から南宋に向けて硫黄（火薬の材料）と木材（板木）が輸出されていたため、日本から南宋への硫黄供給を絶つことに元寇の目的があったとする見解が近年提出されている。服部英雄『蒙古襲来』山川出版社、二〇一四、二一―二五頁。

18 前掲『日本中世の光と影』、一二二頁。

19 『八幡愚童訓』には二種類の系統の本あり、本稿では石清水八幡宮の祀官が記述し、蒙古襲来に際しての八幡大菩薩の靈驗を主として説いているいわゆる「群書類従本」を取り上げた。

20 「神功皇后三韓征伐譚」は、もともと『日本書紀』（七四〇年完成）巻九に詳しく記述され、その後中世に成立した編年体史書である『扶桑略記』（一〇九六年より後に成立）巻二の冒頭に再録され、さらに『八幡愚童訓』に再再録されたものである。ただし、『扶桑略記』に再録された部分は、仲哀九年「春三月」に神功皇后が神の託宣として金銀が豊富な新羅国（財宝の国）の侵攻を告げる発端部分から実際に侵攻に乗り出す「冬十月」以前の前段部分を欠いており、後段の侵攻そのものについても簡略な記述があるだけである。

り異国ヲ討給事、漢家本朝<sup>タメシ</sup>ニ様ナク、女人凡夫ノ態ナラズ。皇后<sup>モシ</sup>若<sup>おぼしめ</sup>女人也ト思食シ、弓箭ヲ取ル御事ナカリセバ、天下早ク異賊ニ被取、日本<sup>たちまち</sup>忽滅亡シナマシ。我国ノ我国タルハ、皇后ノ皇恩也<sup>21</sup> という賛辞が書き加えられており、いかに当時の人々の心性が神功皇后の異国降伏の力を求めていたかを物語っている。

この神功皇后三韓征伐譚に続いて、八幡大菩薩が次のように説明されている。

- ⑩<sup>そもそ</sup>抑も八幡大菩薩者、仲哀天皇第四御子、御母儀ハ神功皇后<sup>おわしま</sup>ニ御坐ス。先皇ハ異国ノ流矢ニ当テ崩御アリ。母后<sup>てづから</sup>ハ手自挑戦シ遂ニ討勝給キ。去バ父母ノ宿敵ナルガ故ニ、異国降伏ノ御志深シテ、末代<sup>まで</sup>儘モ防ガント神明ニ願レ給フ<sup>22</sup>。

神功皇后がいかに「異国降伏」のシンボルとして認識されていたかがわかる。神功皇后が深い眠りから覚め当時の人々に三韓を征伐した記憶（記録）を呼び戻させたのは、蒙古が直接中国から日本に襲来したのではなく、高麗軍とともに朝鮮半島を経由して侵攻して来たことが明らかに関係している<sup>23</sup>。

では、『八幡愚童訓』に元寇は具体的にどのような記述されているのだろうか。

- ⑪<sup>みじかしといへども</sup>蒙古ガ矢ハ雖短、矢ノ根ニ毒ヲ塗リタレバ、中<sup>あた</sup>ル程ノ者、毒氣ニ負ズト云事ナシ。数万人矢鋒ヲ調ヘ如<sup>あめふるごとく</sup>雨降射ケル上、鋒<sup>ながえ</sup>長柄<sup>あきま</sup>物具ノ鱗<sup>はずざず</sup>間ヲ差テ不<sup>はず</sup>外、一面ニ立並ビテ、寄<sup>あ</sup>ル者アレバ中ヲ引退キ、両方ノ端ヲ廻<sup>とりかこみ</sup>合テ取籠<sup>ごんしょなく</sup>テ、無<sup>な</sup>残所<sup>ごんしょなく</sup>討レケル。能<sup>しぬ</sup>振舞テ死<sup>しぬ</sup>ヲバ、腹ヲ開テ肝ヲ取テ是ヲ飲<sup>もとり</sup>ム。目元<sup>あきみて</sup>牛馬ヲ美食ニスル者ナレバ、被<sup>いこみされ</sup>射殺タル馬ヲバ喰<sup>あ</sup>ラヒテ飽<sup>あきみて</sup>満<sup>あ</sup>リ<sup>24</sup>。
- ⑫<sup>そもそ</sup>抑又異国ニ此土〔日本一筆者注〕<sup>くらぶ</sup>ヲ校<sup>くらぶ</sup>ルニ、蒙古ハ犬ノ子孫、日本ハ則<sup>すなは</sup>神ノ末葉也。貴<sup>たのむ</sup>賤<sup>たのむ</sup>相別レ、天地懸隔也。神明ト畜類ト何<sup>な</sup>ソゾ及<sup>ま</sup>対揚。昔<sup>まつとう</sup>新羅ノ仰<sup>まつとう</sup>道行ハ、三<sup>まつとう</sup>婦<sup>まつとう</sup>五<sup>まつとう</sup>戒<sup>まつとう</sup>ノ威力ニ過<sup>まつとう</sup>ザリキ。今<sup>まつとう</sup>本朝ノ憑<sup>まつとう</sup>諸<sup>まつとう</sup>徳ハ、二<sup>まつとう</sup>百<sup>まつとう</sup>五<sup>まつとう</sup>十<sup>まつとう</sup>ノ具足ヲ全<sup>まつとう</sup>ス。尊<sup>まつとう</sup>卑<sup>まつとう</sup>遙<sup>まつとう</sup>ニ別レ、智<sup>まつとう</sup>行<sup>まつとう</sup>深<sup>まつとう</sup>淺<sup>まつとう</sup>アリ。彼<sup>まつとう</sup>ハ一人、是<sup>まつとう</sup>ハ数<sup>まつとう</sup>輩。他<sup>まつとう</sup>国ノ財<sup>まつとう</sup>宝<sup>まつとう</sup>ヲ奪<sup>まつとう</sup>ヒ人民ノ寿<sup>まつとう</sup>命<sup>まつとう</sup>ヲ滅<sup>まつとう</sup>ス、仁<sup>まつとう</sup>義<sup>まつとう</sup>ニモ背<sup>まつとう</sup>キ殺<sup>まつとう</sup>盗<sup>まつとう</sup>ヲ兼<sup>まつとう</sup>タル非<sup>まつとう</sup>道<sup>まつとう</sup>ト、吾<sup>まつとう</sup>朝ノ仏<sup>まつとう</sup>法<sup>まつとう</sup>ヲ守<sup>まつとう</sup>リ社<sup>まつとう</sup>稷<sup>まつとう</sup>ノ神<sup>まつとう</sup>祇<sup>まつとう</sup>ヲ敬<sup>まつとう</sup>ヒ、五<sup>まつとう</sup>常<sup>まつとう</sup>ニ随<sup>まつとう</sup>ヒ十<sup>まつとう</sup>善<sup>まつとう</sup>ヲ好<sup>まつとう</sup>ム正<sup>まつとう</sup>理<sup>まつとう</sup>ト、三<sup>まつとう</sup>宝<sup>まつとう</sup>知<sup>まつとう</sup>見<sup>まつとう</sup>シ、吾<sup>まつとう</sup>神<sup>まつとう</sup>照<sup>まつとう</sup>覧<sup>まつとう</sup>シ給<sup>まつとう</sup>ラン<sup>25</sup>

21 日本思想大系『寺社縁起』岩波書店、一九七五、一八一頁。

22 同、一七八頁。

23 高麗については、「弘安四年ノ夏比、蒙古人、大唐・高麗以下ノ国々共ノ兵ヲ駈<sup>かりぐし</sup>具テ、十万七千八百四一艘ノ大船ニ数千万人乗連テ襲来ス。其中ニ高麗ノ兵船五百艘ハ壱岐・対馬ヨリ上リ、見<sup>み</sup>ル者ヲバ打殺ス。人民堪難テ、妻子ヲ引具シテ深山ニ逃入ル処ニ、赤子ノ泣声ヲ聞付テモ押寄ケレバ、片時ノ命モ惜ケレバニヤ、<sup>サシモ</sup>徧<sup>ま</sup>愛<sup>ま</sup>スル緑子ヲ我ト泣々害シツ、世ノ中ニ最<sup>いとおし</sup>惜<sup>いとおし</sup>キ物ハ子也ケリ 其二増ルハ我身也ケリト詠ジケル、人ノ愛<sup>スミ</sup>ゾ思出ラル、」というように、高麗人が嬰兒までも殺そうと襲ってきた残忍性が記述されている。同、一七九頁。

24 同、一八四頁。

25 同、一九一―一九二頁。

蒙古の兵士はみな毒矢を持っており、それを雨が降るごとく大量に射て来る。そして彼らは毒矢に当たって死んだ者の腹を切り裂いて肝臓を取り出して飲み込み、死んだ馬の肉までも飽食する。それゆえ、彼らは「犬ノ子孫」であり、「畜類」であり、「非道」の異族である。それに引き換え、日本は「神ノ末葉」であり、「神明」であり、「正理」の民族であるという。

この「降伏事」と表題が付けられた部分には、「神功皇后ハ海水ヲ上げ、文永ニハ猛火ヲ出シ、弘安ニハ大風ヲ吹ス。水火風ノ三災、劫末ナラネド出来テ、任神慮自在也。濁世末代ノ受生、謀反殺害ノ時ニ逢ルハ雖悲、〔八幡〕大菩薩ノ靈験新ニシテ、(中略)末代儘モ尽セヌハ、只八幡ノ靈威也。』<sup>26</sup>という記述があり、末尾が神功皇后と八幡大菩薩の「靈験」や「靈威」に対する敬意で締めくくられているところに、当時の人々の心性が如実に表現されていると言えよう。

元寇が当時の人々にもたらした恐怖は、蒙古（モンゴル人）を人や馬を襲って食べる獍猛な人種、すなわち「犬ノ子孫」「畜類」「非道」の異族という認識をもたらす一方で、自分たち日本人は、神功皇后や八幡大菩薩によって守られている「神ノ末葉」「神明」「正理」の民族であるという対照的な認識を生み出した。

では、こうした認識が、これ以降の人々の心性にどのような影響を及ぼし、またどのようなストーリーが描かれたのであろうか。

## (2) 『太平記』『神皇正統記』に記述された自他認識

『八幡愚童訓』以降、蒙古がどのように記述されたかについて、当時の人々に広く読まれたテキストである『太平記』『神皇正統記』等に記載された言説を確認しよう。

### ⑬ 『太平記』（一三七〇年代？）巻第三十九〇自太元攻日本事

「備 三余の暇（冬と夜と雨の時一筆者注）に寄て千古の記する処を看るに、異国より吾朝を攻し事、開闢以来已に七箇度に及べり。殊更文永・弘安両度の戦は、太元国の老皇帝支那四百州を討取て勢ひ天地を凌ぐ時なりしかば、小国の力にて難退治かりしか共、輒く太元の兵を亡して吾国無為なりし事は、只是尊神靈神の冥助に依し者也。……日本一州の貴賤上下如何がせんと周章騒ぐ事不斜。諸社の行幸御幸・諸寺の大法秘法、宸襟を傾て肝胆を碎かる。都て六十余州大小の神祇、靈験の仏閣に勅使を被下、奉幣を不被捧云所なし。如此御祈祷已に七日満じける日、諏訪の湖の上より、五色の雲西に聳き、大蛇の形に見へたり。八幡御宝殿の扉啓けて、馬の馳ちる音、響の鳴音、虚空に充滿たり。日吉の社二十一社の錦帳の鏡動き、神宝刃とがれて、御沓皆西に向へり。住吉四所の神馬鞍の下に汗流れ、小守・勝手の鉄の楯己と立て敵の方につき双べたり。凡上中下二十二社の震動奇瑞は不及申、神名帳

26 同、一九三頁。

に載る所の三千七百五十余社乃至山家村里の小社・櫛社・道祖の小神迄も、御戸の開ぬは無しけり。此外春日野の神鹿・熊野山の靈鳥・氣比宮の白鷺・稻荷山の名婦・比叡山の猿、社々の仕者、悉虚空を西へ飛去ると、人毎の夢に見へたりければ、さり共此神々の助にて、異賊を退け給はぬ事はあらじと思ふ許を憑にて、幣帛捧ぬ人もなし。浩る処に弘安四年七月七日、皇太神宮の禰宜荒木田尚良・豊受太神宮の禰宜度会貞尚等十二人起請の連署を捧て上奏しけるは、「二宮の末社風の社の宝殿の鳴動する事良久し。六日の暁天に及て、神殿より赤雲一村立出て天地を耀し山川を照す。其光の中より、夜叉羅刹の如くなる青色の鬼神顕れ出て土囊の結目をとく。火風其口より出て、沙漁を揚げ大木を吹抜く。測ぬ、九州の異狄等、此日即可滅と云事を。事若誠有て、奇瑞変に应ぜば、年来申請る処の宮号、被叡感儀可火宣下。」とぞ奏し申ける。去程に大元の万將軍、七万余艘のもやひをととき、八月十七日辰刻に、門司・赤間が関を経て、長門・周防へ押渡る。兵已に渡中をさし、し時、さしも風止み雲閑なりつる天気俄に替て、黒雲一村良の方より立覆ふとぞ見へし。風烈く吹て逆浪大に漲り、雷鳴霆て電光地に激烈す。大山も忽に崩れ、高天も地に落るかとをびた、し。異賊七万余艘の兵船共或は荒磯の岩に当て、微塵に打碎かれ、或は逆巻浪に打返されて、一人も不残失にけり。……抑太元三百万騎の蒙古共一時に亡し事、全吾国の武勇に非ず。只三千七百五十余社の大小神祇、宗廟の冥助に依るに非ずや。」<sup>27</sup>

27 日本古典文学大系『太平記』三、岩波書店、一九六二、四五一―四五六頁。現代語訳は、「つくづく暇な時（冬と夜と雨の時）に千古の歴史が記された書物を見ていると、異国からわが国を攻めたことは開闢以来すでに七回に及んでいる。とくに文永・弘安の二度の戦争は、太元国の老皇帝（フビライ）が中国の四百州を討ち取ってその勢いが天地を圧倒する時だったので、小国の力で退治することは難しかったものの、すぐさま太元国の兵を滅ぼしてわが国に何事もなかったことは、ただただ尊神靈神のご加護によるものである。……日本中の貴賤上下がどうしたものかとあわてふためくさまは尋常ではない。いろんな神社への行幸や御幸、またいろんな寺院での大法秘法の祈祷など、天皇は全身全霊を傾けられた。日本国中の六十余州の大小の神祇や靈験あらたかな仏閣に勅使を下され、奉幣を捧げられなかった所はなかった。こうして御祈祷がすでに七日目になった時、諏訪湖のほとりから五色の雲が西にたなびき、大蛇の形に見えた。八幡神社の御宝殿の扉が開き、馬が馳ける音や手綱の鳴る音が虚空に充満した。日吉神社（現滋賀県の日吉山王社）の二十一社の錦のとばりに付けられた鏡が動き、神宝である刀の刃が研がれ、神兵の靴先はすべて西を向いた。住吉神社の四ヶ所にいる神馬の鞍の下に汗が流れ、小守社や勝手社（ともに熊野神社に属する社）の鉄の楯はひとりで立ち上がって敵の方に向けて並んだ。全部合わせて上中下二十二神社の震動や奇瑞は言うまでもなく、神名帳に掲載された三千七百五十余の神社や、山奥や村里の小神社・櫛社・道祖神などの小さな神々までも、扉が開かない神社はなかった。この他にも、春日神社の神鹿や熊野神社の靈鳥、氣比大神宮の白鷺、伏見稻荷の狐、比叡山の猿など、神社に仕える動物もすべて虚空を西に飛び去っていったと誰もが夢に見たので、どんなことがあってもこの神々の助けによって異賊を退けてくださらないことはあるまいと思ふ気持ちを頼りにして、幣帛を神社に捧げない人はいなかった。そうしたところ、弘安四年（一二八一）七月七日、皇太神宮（伊勢神宮の内宮）の神

## ⑭ 同、神功皇后、新羅を攻め給う事

「其徳天に叶ひ其化遠に及し上古の代にだにも、異国を被順事は、天神地祇の力を以てこそ、容易征伐せられしに、今無悪不造の賊徒等、元朝高麗を奪犯、牒使を立させ、其課を送らしむる事、前代未聞の不思議なり。角ては中々吾朝却て異国に奪るゝ事もや有らんずらんと、怪しき程の事共也。」<sup>28</sup>

## ⑮ 『神皇正統記』 後宇多院

「ことし北狄の種、蒙古おこりて元国といゝしが宋の国を滅す〈金国おこりにしより宋は東南の杭州にうつりて百五十年になれり。蒙古おこりて、先金国をあはせ、のちに江をわたりて宋をせめしが、ことしつゐにほろぼさる〉。辛巳の年〈弘安四年なり〉蒙古の軍おほく船をそろへて我国を侵す。筑紫にて大に合戦あり。神明、威をあらはし形を現じてふせがれけり。大風にはかにおこりて数十万艘の賊船みな漂倒破滅しぬ。末世といへども神明の威徳不可思議なり。」<sup>29</sup>

---

官である荒木田尚良と豊受太神宮（伊勢神宮の外宮）の神官である度会貞尚等十二人が起請文に連署して上奏し、「二宮（皇太神宮と豊受太神宮）の末社である風の宮の宝殿が鳴動することが久しく続いております。六日の朝空に神殿から赤い雲が湧き立って天地を輝かし山川を照しました。その光の中から夜叉鬼や羅刹鬼のような青色の鬼神が現れ出て、土囊の結び目をほどきました。すると火の風がその口から出て、砂や魚を舞い上がらせ、大木をも吹き飛ばしました。きっと九州の異獣どもはこの日に滅んだはずだと確信しました。事態がもし本当にそうなり、奇瑞が異変に応じて現れ出たならば、年来お願い申し上げます宮の号をお褒めの言葉とともに宣下くださりませ。」と申し上げた。そうこうするうちに大元の万將軍（范文虎のこと）は七万余艘の綱を解き、八月十七日辰刻に門司・赤間関を経て長門・周防へ押し寄せてきた。元の兵隊がすでに半ば渡った時、あれほど風がやんで雲が静かだった天気が急に変わり、ひとかたまりの黒雲が東北の方角から立ち上ってくるのが見えた。風がひどく吹き荒れ、逆波が天にほとばしり、雷鳴が鳴り響いて電光が地に炸裂した。大山もたちまち崩れ、高天も地に落ちるかと思うほどのおびただしさである。異賊七万余艘の兵船はあるものは荒磯の岩に当たって微塵に砕け、あるものは逆巻く浪に打ち返されて一人残らず消えてしまった。……そもそも太元三百万騎の蒙古があつという間に敗れ去ったことは、まったくわが国の武勇によるものではない。ただただ三千七百五十余神社の大小の神祇や宗廟のご加護によるものなのである。」

28 同、四五八頁。現代語訳は、「そ（神功皇后）の徳が天に届き、その教化が遠くに及んだ上古の代でさえも、異国を従わせることは天神地祇の力によってこそ容易に征伐できたのに、いま悪事とことんまでやるような賊徒たちが元朝や高麗を奪い犯し、使者に命じて金品を送らせるなどということは、前代未聞の不可思議なことである。こうしてみると、あるいはわが国が逆に異国に奪われるようなものもあるのではなからうかと、怪しまれるような出来事である。」

29 岩波文庫『神皇正統記』岩波書店、一九七五、一六〇頁。現代語訳は、「今年北狄の人種である蒙古が勃興して元国と言ったが、宋国を滅した〈金国が勃興して以来、宋は東南の杭州に移って百五十年になっていた。蒙古が勃興すると、まず金国を併合し、後に揚子江を渡って宋を攻めたが、今年ついに滅ぼされてしまった〉。辛巳の年〈弘安四年〉蒙古軍が大挙船をそろえてわが国を侵略しようとした。筑紫で大きな合戦があった。神明が威力をあらわして、目に見える形で蒙古軍を防いだ。大風がにわかに巻き起こって数十万艘の賊船がすべて漂倒し破滅してしまった。末世といっても、神明の威徳は不可思議なものである。」

⑩『諸神本懐集』（一三二四）

「この大日本国は、もとより神国として、靈験いまにあらたなり。天照大神の御子孫は、かたじけなくにのあるじとなり、天兒屋根命の苗裔は、ながく朝のまつりごとをたすけたまふ。垂仁天皇の御代より、ことに神明をあがめ、欽明天皇の御とき、仏法はじめてひろまりしよりこのかた、神をうやまふをもて、くにのまつりごと、し、仏に帰するをもて、世のいとなみとす。これによりて、くにの感応も他国にすぐれ、朝の威勢も異国にこへたり。これしかしながら、仏陀の擁護、また神明の威力なり。こゝをもて、日本六十六箇国のあひだに、神社をあがむること、一万三千七百余社なり。」<sup>30</sup>

⑪『神皇正統記』（一三三九）

「大日本者神国也。天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を伝へ給ふ。我国のみ此事あり。異朝には其たぐひなし。此故に神国といふなり。神代には豊葦原千五百秋瑞穂国と云ふ。天地開闢の初より此名あり。天祖国常立尊、陽神陰神にさづけ給し勅にきこえたり。天照太神、天孫の尊に譲ましまし〔にも〕、此名あれば根本の号なりとはしりぬべし。又は大八州国といふ。是は陽神陰神、此国を生給しが、八の嶋なりしによつて名けられたり。又は耶麻土と云ふ。是は大八州の中国の名なり。」<sup>31</sup>

⑫『唯一神道名法要集』（一四八六）

「吾が神道は、万物に在りて一物に留らず。所謂風波、雲霧、動静、進退、昼夜、隠顕、冷寒、温熱、善悪の報、邪正の差、統べて吾が神明の所為に非ずといふこと

---

30 日本思想大系『中世神道論』岩波書店、一九七七、一八三—一八四頁。現代語訳は、「この大日本国は、もともと神国であった、靈験が今もあらたかである。天照大神の御子孫が、かたじけなくもわが国の主となり、天兒屋根命の苗裔（藤原氏のこと）は、長期にわたって朝廷の政治を助けていらしゃる。垂仁天皇の御代からは特に神明をあがめられ、欽明天皇の時に仏法が初めて広まって以来、神を尊敬することによって国の政治を行い、仏に帰依することによって世間のいとなみを行った。これらによって、日本における仏と衆生との感応は他国にまさり、朝廷の威勢も異国を超えているのである。これはしかしながら、仏陀の擁護や神明の威力によるものである。それゆえ、日本六十六箇国においてあがめている神社は、全部で一万三千七百余社である。」

31 前掲『神皇正統記』、一五頁。現代語訳は、「大日本は神国である。天祖が初めて国の基礎を開き、日神が長い間皇統を伝えてこられた。わが国だけにこの事があり、異国にはこのような伝統はない。それゆえに神国と言うのである。神代には豊葦原千五百秋瑞穂国と言った。天地開闢の初めからこの名があった。天祖である国常立尊が陽神陰神にお授けになった詔勅にこう書いてあった。天照太神が天孫の尊に国をお譲りになったときにもこの名があるので、根本の号であることがわかる。または大八州国と言うこともある。これは陽神陰神が此国をお生みになった時、八つの嶋だったことによつてこう名づけられたのである。または大和と言うこともある。これは大八州の中つ国の名である。」

莫き者也。故に天地の心も神也。神仏の心も是れ神也。鬼畜の心も是れ神也。草木の心も是れ神也。何に況んや人倫いかに於いてを哉。意を以て理を成し、意を以て言を成し、意を以て手足を成す。皆是れ心神の所為也。一切の含靈は神に非ずといふこと莫き者也。故に成仏と云ひて成神と云はず。物として神靈を含靈せずといふこと無し。』<sup>32</sup>

これら⑩～⑱の資料から、以下の二点を確認することができる。

- (h) 蒙古との出会い＝元寇によって、「尊神靈神の冥助」（史料⑬下線部）「宗廟の冥助」（同）「天神地祇の力」（史料⑭下線部）「神明の威徳」（史料⑮下線部）「神明の威力」（史料⑯下線部）に日本人の関心が集中し<sup>33</sup>、日本が「神国」であること（史料⑯⑰）が再確認されることになった。また、蒙古襲来と神功皇后伝説がセットで語られていることは、朝鮮も日本を侵略する異国として認識され始めたことを物語っている。
- (i) 元寇による「神明」への絶対的帰依は、万物が「神明の所為」によるものという認識を拡大させた。その結果、神道の教え（伝統）が日本だけに伝わっているという＜日本中心の世界観＞が成立したと考えられる。すなわち、モンゴル（元寇）との出会いによって、日本人は中国中心の世界観やインド（天竺）中心の世界観からの自立を達成したと言えるだろう。

#### 4 結語

モンゴルとの出会いは、朝鮮では高麗時代の征服時にも＜中国との代替＞として認識しようとし、政治的には臣従（臣事）しているものの、元が明に取って代わられるとただちに中国への臣従が復活する。さらに、以前にも増して＜中国との一体化＞が重要な政治的・思想的課題として認識されることになった。

32 同、二四六～二四七頁。現代語訳は、「わが神道は、万物にあって一物だけに留まるものではない。いわゆる風波、雲霧、動静、進退、昼夜、隠顕、冷寒、温熱、善悪の報、邪正の差は、すべてわが神明のしわざでないものはない。ゆえに天地の心も神である。神仏の心も神である。鬼畜の心も神である。草木の心も神である。ましてや人倫は言うまでもない。意によって理を作り、意によって言葉を作り、意によって手足を形成した。すべては心神のしわざである。一切諸物の含靈が神でないということはないのである。ゆえに成仏とは言うが、成神と言わないのである。物であって神靈を含靈しないものはないからである。」

33 村井章介は、第一回目の元寇（文永の役）直後に、鎌倉幕府が「この戦争を境に、公的な立場から寺社に対して異国降伏の祈祷を命ずるようになった。祈祷は、神々を奮い立たせて異賊との戦いに赴かせる実体的な力をもつものと観念されており、その意味で立派な戦闘行為だったから、これを行う寺社への恩賞もまた幕府の責務となった」と述べており、幕府が寺社の祈祷を公的に支援していたことを明らかにしている。岩波講座『日本通史』第8巻中世2、村井章介「一三―一四世紀の日本―京都・鎌倉」、二三頁。

一方、日本ではモンゴルとの出会いは「元寇」を神風＝「神明」によって撃退したという認識を広範囲に生み出し、日本人の「神明」への帰依を要請したと考えられる。神道への関心の高まりは、やがて神道への絶対的帰依（神国思想の隆盛）をもたらし、結果的に＜日本中心の世界観＞が成立したことを物語っている。

北東アジア胚胎期（13～14世紀）における朝鮮と日本の自他認識は、モンゴル侵攻を契機として、朝鮮では＜中国との一体化＞を、日本では＜日本中心の世界観＞を、それぞれ思想的課題として生み出した。しかし、それはあくまでもモンゴルと中国に対する自他認識の変容であり、両国人の自他認識に「北東アジア」という新たな空間認識（世界観）を生み出すまでには至らなかったと結論づけられる。

キーワード 北東アジア、自他認識、元、蒙古、元寇、高麗史、朝鮮王朝実録、八幡愚童訓、太平記、神皇正統記

(INOUE Atsushi)